Japan Information-Culture Society

情報文化学会　第５回全国大会要旨（１９９７年１１月東京）

情報文化と伝統文化について
―――京都祇園祭を中心とした考察（１）―――

明治大学　三好賢周

<あらまし>

７月１７日の山鉾巡行で名高い京都の祇園祭は、日本三大祭の筆頭として、前日より内外から多数の人達がどっと繰り出す。

その様は、絢爛で雅な面が強調され、今日では観光イベントとしての印象を与える。

しかし、単なる祭というより７９４年の平安京以降、従来からの渡来文化も取り入れての日本文化の情報発信という歴史的役割を担っており時代の変遷とともに集大成したものと考えられる。－この日本特有の文化を、私は３年前の全国大会で、「日米情報文化比較」にて、『玉ネギのような文化』という表現を借りたのであるが、京都祇園祭は、まさにその見本と考えてよいと思う。

ところで、昨今、「八坂神社と祇園祭は、関係がないように受け取られる観光パンフレットがあるようだ。」と聞き及んだ。

それが事実でない事は、平安京、八坂神社（祇園社）との関わりを検証していくことで明らかになるが、今回は、「京都祇園祭」が、いかなる時代背景でもって継承されてきたのかを探り、その上で「伝統文化」として将来に向けてどのような形態で受け継がれるのか、あるいは、受け継ぐことができるのかを、甚だ力不足で大胆とは思うが情報文化の視点より試みてみたい。

諸先生方より、御教示賜ればまことに幸いに存じます。

［1］はじめに

祇園祭は、京都の夏を彩る町衆の祭として日本三大祭の一つに数えられる世界的によく知られている。それは、７月１日より７月３１日まで１ヶ月間にわたり、なかでも７月１７日の山鉾巡行はハイライトとしてそのスケールと１２００年の伝統文化に目を奪われるのであるが、本来、八坂神社の祭礼であった。

八坂神社は、かって祇園社または祇園感神院と称し永く神仏習合の形でまつられ、神社でありながら僧侶が神事をおこない、祇園祭もまた、神道、仏教、儒教、道教はては、キリスト教まで混然と融合した形で発達してきた。それぞれの町々で特色のある鉾なり山なりを作り、天神さま、八幡さま、神宮皇后等日本の神話や史実に取材した山ばかりでなく、中国の故事や仏教の教え、道教の信仰まで取り入れた山もある。

さらに、山鉾を飾りたてる懸装品（けそうひん）の中には、中国、朝鮮、インド、トルコ、ペルシャ、ベルギー、イギリス、フランスなど世界中から渡来した貴重な染織品を見ることができる。　又、ギリシャ神話やローマ史話、旧約聖書を題材にしたタペストリーもある。

例えば、①函谷鉾（かんこ）の前掛は、旧約聖書の創世記第二十四章にあるイサクの子に水を提供する図。

②鯉山には、、ホメロスの叙事詩『イーリアス』の「トロイア戦争の物語」がある。

③鶏鉾（にわとり）と霰（あられ）天神山には、「出陣するヘクトールの妻子との別れ」、④白楽天山には、「陥落したトロイアから脱出するイーリアス」がある。このイーリアスのタペストリーは、戦国大名の伊達正宗が欧州に派遣した支倉常長が持ち帰ったものである。

⑤函谷鉾の見送には、弘法大師の礼讃文（らいさんもん）もあり、仏教も同居している。

あらゆる宗教や思想、文物をも取り入れて豊かに発達してきていた。まさに、諸宗教、諸文化の融合であり国際的な交流の営みを積み重ねて今日に至っている。

祇園祭は、重層的な日本の信仰を一つの祭の中に具現化した－日本的シンクレティズム－典型と考

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

えられる。

そして、この祭を遂行する為に人々はみごとな社会的融合を達成し、また社会の活性化に寄与してきた。

これは、京の町衆という民衆が－根本に祇園の神にたいする信仰のもとに－参加し、京都を挙げての祭であり京都の文化を育んできた祭だからである。

この京文化は、明治二年に東の京に都が遷されるまで、「天子さまの御座される平安京」ということで、日本の文化の情報発信源であった。

国司が下向し、また都で志を得ない公家達が地方に下るにつけても、都の文化を移植した。文学、美術、芸能、織物、染色、工芸等々すべてがここから興って全国に及び、今日、日本各地で小京都といわれる所が多く存在している所以でもある。

しかも、その美術工芸等の文化のすべてが祇園祭と結びついて、山鉾の懸装品・飾金具はもちろん、屏風に描かれた絵画、祭に使用する漆器の蒔絵等も祇園祭を契機に発達、また、中世に京都の文化として成立した能楽や茶の湯も祇園祭と深く関わっていることは、大いに注目すべきである。

例えば、①応仁の乱の戦火を避けて土佐に逃げた一条教房が作った土佐中村
②大内氏は、京に憧れて山口という城下町をつくり、③山口からわかれた津和野も京と同じような町をつくった。これらの町は、小京都と呼ばれ、今日では全国四十五都市に及ぶ。いずれも、山鉾に似せた山車（だし）や屋台があり、祇園囃（ばやし）、祇園太鼓の類がみられる。

又、小京都といわなくとも祇園の神を祭るところ、祇園祭を移植したところは百ヶ処余にもなる。祇園祭を範として、曳山、屋台、山笠等を称し、武者人形や、からくり人形で飾り、いわゆる風流（ふりゅう）という形になっている。

博多の祇園山笠、小倉の祇園太鼓、関東では、川越の祇園、熊谷の祇園、日立の風流物等々いずれも祇園祭が伝播していったもので、それぞれ土地柄を反映した特色ある地域伝統芸能となっている。

［2］八坂神社（祇園社）

(1)平安京と八坂　(2)八坂郷と八坂の塔　(3)八坂神社（祇園祭）の祭神と創祀　①スサノヲのミコトと牛頭（ごず）天王　②蘇民将来の説話　③祇園精舎　④二十二社

については、ページ制限により割愛。

［3］祇園祭の発生

(1)御霊（ごりょう）信仰と御霊会

延暦十三年（７９４年）桓武天皇は都を山背（やましろ）に遷され、永遠の平安を祈って「平安京」と命名、以後、千余年にわたる都のはじまりである。

しかし、都に人々が密集し生活が営まれてくると、必然的に発生するのが疫病である。防疫・予防対策や医療技術の発達した今日でさえ、０－１５７のような食中毒により多数の死者、罹病者を出したことでもわかるとおり、ひとたび発生した疫病に当時の人々は、なすすべを知らなかった。

そこで、原因は無実の罪に問われて処刑された人の怨霊と考え、その祟を鎮めようとして起こったのが御霊信仰であり、鎮魂の行事が御霊会であった。

御霊信仰はすでに奈良時代よりはじまっており、疫神のもたらす災厄を鎮める祭があった。

「大宝令」には、疫病のおこるのは晩春、疫神が花びらにのって散る為と考え、鎮花祭を行ったことが記されている。又、京成の四隅や畿内の堺で疫神の進入を防ぐ疫神祭や、毎年６月・１２月に日を選んで、八衢比古（やちまたひこ）・八衢比売（ひめ）・久那度（くなど）の三神を祭って邪霊が入ってくるのを防ぐ道饗（みちあえ）祭もそうである。

平安時代に入り、相次いで発生する疫病や天災を、とくに政治的失脚者による御霊（怨霊）の祟りと考えて御霊会が始まった。藤原時平の讒言によって太宰府に左遷された菅原道真の死後、京都に頻

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

繁に発生した災異を道真の怨霊のしわざと考え、清涼殿に落雷もその祟りとみて天神信仰が起こったのもその一つである。『三代実録』貞観五年（８６３年）五月二十日の条によると、近代疫病しきりに起こり、死者の数おびただしいのは、むじつの罪によって誅された人々の御霊が祟りをするのであるからと、藤原基経と藤原常行が遣わされ、神泉苑で御霊会を行った由を記し、祭る霊は、崇道天皇（早良親王）、伊予親王、藤原吉子、橘逸勢、文室宮田麻呂であるとして、机に花果を盛り、金光明経、般若心経を説き、楽を奏し、雑伎、散楽の芸能を競い、角丸、騎射、競馬等の演戯があって、人々の群参したさまが描かれている。

(2)祇園御霊会の始め

『三代実録』貞観七年（８６５年）六月十四日の条に、「是日、京幾七道諸人、事を御霊会に寄せ私に徒衆を聚め、走馬騎射することを禁ず。小児の聚戯は制限に在らず。」とあって、御霊会にこと寄せて群衆の集まることを禁じている。これは、さきの貞観五年（８６３年）以降、御霊会が盛んになるとともに群衆による事故発生を懸念した措置と考えられる。ここにある、六月十四日という日は、祇園祭の後祭の日であることからみて、祇園御霊会の始めであるとみてよい。

ついで、『祇園社本縁録』に、「貞観十一年、天下大疫の時、宝祚降永、人民安全、疫病消除鎮護の為に、卜部日良麻呂、勅を奉じ、六月七日、六十六本の矛を建て、長さ二丈許、同十四日、洛中男児及び郊外の百姓を率いて神輿を神泉苑に送り、以て祭る。是を祇園御霊会と号す。爾来毎歳六月七日、十四日、恒例と為す。」と、記されていた。

残念ながら、この『祇園社本縁録』は現在失われており見ることはできないが、林屋辰三郎氏はじめ多くの先学もこの記事を肯定されていて、社伝でもこの時全国の国教に応じた六十六本の矛を立て、また洛中の男児が神輿を神泉苑に送って祭り、これを御霊会とよんだことで、祇園会の起源としている。

別の社蔵の記録『祇園社本縁雑録』にも、山城国愛宕郡八坂郷貞観十一年天下大疫の時、「勅して疫神を八坂郷に祭る」とあり、貞観十一年（８６９年）を祇園御霊会（祇園祭）のはじめとしている。

又、『二十二社註式』に、「円融天皇・天禄元年（９７０年）御霊会を始む。今年より之を行う。」とあり、一説には「円融・天延二年（９７４年）始む。」ともあり、円融天皇の勅命でもって、このときから祇園御霊会が官祭となったことがうかがえる。

(3)祇園祭の発達

その後、年々規模もおおきくなり盛んになり、応仁の乱前、既に六月七日に三十一基、十四日に二十七基の山鉾の名が『祇園社記』（第十五）－重要文化財－に記されている。

これにより、現在ある山鉾の大半は既に応仁の乱（１４６７年）以前にあったことが判明している。

応仁の乱－応仁元年（１４６７年）～文明九年（１４７７年）－で、都は焼け野原になり、五十八基あった山鉾もほとんどが被害を受け、神輿の巡行も途絶え、祇園祭は一時中断の止むなきにいたった。

十一年に及ぶ戦乱による荒廃から立ち直る為には、何よりも人々の心を一つに結集することが必要であった。それには、何があるかといえば「祭」であった。

幕府は、祭礼を復興するよう祇園社に命じたが、神輿も消失しており再造するにしても多大な費用を要し、容易ではなく、榊を用いて渡御の神事を行わざるを得なかった。

それ故、「神事これなくとも山鉾渡したし」という要求が町衆より出て、山鉾巡行のみ復活という経緯があった。

乱後、二十三年を経た明応九年（１５００年）ようやう山鉾三十六基が揃い、都は再びはなやかな文化を取り戻した。

ところが、この再興に際して、山鉾巡行の順番をめぐる論争が生じ、侍所長官松田頼亮の指示により六角堂で「くじ取り式」を行い巡行順を決めるしきたりが始まった。

これが今日の、「くじ取り」及び、巡行日当日に於ける、一見ユーモラスに感じられる「くじ改め」

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

という形となった。

そして、桃山時代の豪華絢爛の風潮をうけて山鉾にも贅を尽くすことになり、京都の文化が集約的に反映することになる。

近世には、度々の火災により多くの山鉾が消失したが、その都度、町衆の意地と努力と決断で再興し、今日まで継承してきた。

(4)祇園祭の次第

昔は陰暦六月七日に神輿が巡行し御旅所に留まり、それに先立って、前祭りの山鉾が都大路をお祓いし、十四日に再び神輿が市中を巡行して本社に帰り、同日、後山がやはり神輿に先だってお祓いをする。

この山鉾が、それぞれ風流に贅を競って飾り立て、今日見るような絢爛豪華な山鉾に発達した。

その場合、神輿の渡御は神事として行ったのに対し、山鉾巡行は町衆の行事であった。神事とは、神輿渡御のことで、現在も神輿渡御は神事として行っている。

この六月七日の前祭と十四日の後祭は、太陽暦の採用によって、明治以後、七月十七日と二十四日になり、さらに昭和四十一年以来、前祭に山鉾巡行は統合されて一本化された。現在は、七月十七日に山鉾巡行、当夜、神幸祭が行われ神輿が御旅所に渡御し、二十四日に花笠巡行、その夜、還幸祭があり神輿は本社に還る。花笠巡行は、後祭の山鉾巡行が、七月十七日に統一されて、なくなったので、それに代わるものとして誕生した。

また、七月十日と二十八日には神輿洗式がある。これは、鴨川の水を汲んで神輿のお祓いをするのであるが、水を汲むのは鴨川の四条大橋の下で、そこを特に宮川という。

神輿洗いは、本来祇園祭のための神迎えと神送りを意味したものと思われる。

そして、七月二十九日に神事済奉告祭を行い、三十一日に疫神社の夏越祓ですべてを終わる。

※行事詳細は、(別表－３　現行の祇園祭主な行事表）を参照。

［4］伝統文化としての祇園祭

(1)京都は、宮廷を中心に平安時代以来、美術工芸、染色、刺繍、組紐、織物、飾り金具等の職人が多数集まっており、又、彼らも自ら持てる技術を惜しみなく祇園祭に注ぎ込んだといえる。

一方、同業者集団である「座」の特権をもとに営業活動を行った。例えば、材木座、練絹座、小袖座、綿座、袴腰座、菓子座、釜座、魚座等や、猿楽・田楽等の芸能集団等もあり、中京・下京の室町を中心に問屋衆の誕生で、町衆への形成となる。

これらの人々は、祇園社の祭礼に奉仕することにより、神人（じにん）と称し、祇園祭の担手氏子として、今日の清々講社・宮本講社・山鉾連合会へと組織化発展してきた。

又、近年になり、将来へ向けて護持継承の為、祇園講および八坂神社奉賛会が新たに発足した。

現在の氏子区域（２５学区）は、

中京区：教業、城巽、竜池、初音、柳池、銅駝、乾、本能、明倫、日彰、生祥、立誠、朱雀

下京区：郁文、格致、成徳、豊園、開智、永松、有隣

東山区：弥栄、有済、新道、六原、清水

である。

(2)前述の［１］～［３］にて、歴史的背景、経緯および関連を考察したのであるが、ここで伝統文化として、祇園祭を位置付ける為、「動く博物館・美術館」、「動く正倉院」と評される①山と鉾の本体と特徴　②その懸装品や人形と面、　③祇園祭と能楽および茶の湯　④各鉾町屋と町衆、等について、ハード面、ソフト面といった観点より整理分類、一表化を図り、まとめとする。

［Ｆｉｇ－１　　平安京の四神および風水］

［Ｆｉｇ－２　　八坂神社の位置と境内図］

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

［Ｆｉｇ－３　　応仁の乱前　山鉾および神人居住地］
［Ｆｉｇ－４　　現在の山鉾分布図］
［Ｆｉｇ－５　　鉾と山の構造］
［Ｆｉｇ－６　　現行の鉾（９基）と山（３２基）一覧］
［Ｆｉｇ－７　　現行の鉾（９基）と山（３２基）の特徴］
［Ｆｉｇ－８　　現在の山鉾分布と巡行コース］
［Ｆｉｇ－９　　祇園祭と文化の関係］
［Ｆｉｇ－１０　日本的重層信仰］
［Ｆｉｇ－１１　祇園祭のハードウェアとソフトウェア］
［別表－１　ソシモリ（蘇塗）図］
［別表－２　スサノヲのミコトとクシナダヒメのミコト図］
［別表－３　現行の祇園祭主な行事表］

<あとがき>

今回の発表論文では、副題の性質上、どうしても古代史や古文書に触れなければならなくなり、－私事ではあるが、かって祇園神社の氏子（明倫幼稚園、龍池小学校、そして神泉苑近くにある朱雀高校卒業）、現在は祇園講の一員であり、又、今年の祇園祭では、小二の甥が放下鉾の囃方（鉦衆）として巡行に参画したこともあって－
八坂神社および宮司でおられる真弓常忠先生（永らく皇學館大学の教授をされ、現在、名誉教授）には、身に余る御好意、多大な御教示を賜った。

ここに、改めて厚く御礼申し上げる次第である。

なお、所期のネライのうち、情報文化との接点は論じ得たと思うが、今日の高度情報社会での国際化を視野に入れた時、伝統文化としての京都祇園祭が、マルチメディアによって、どのような形態でもって将来へ受け継がれていくかは、今後の課題となった。

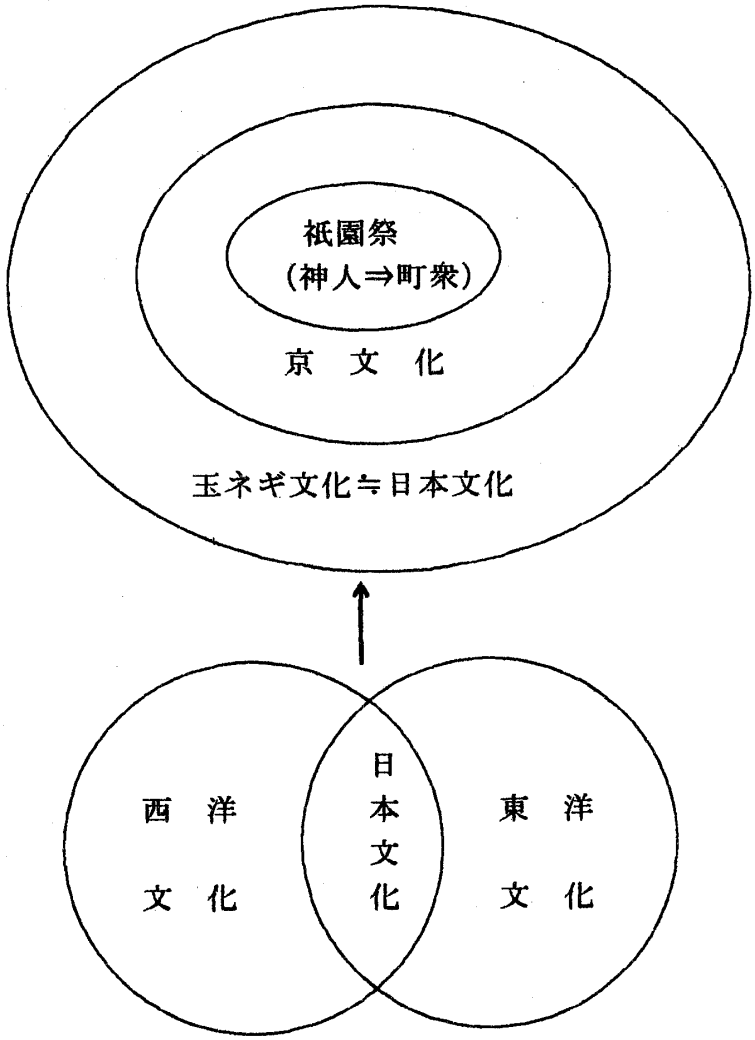
〔参考文献〕

１．三好賢周　　日米情報文化の比較・分析　　第２回情報文化学会全国大会講演予稿集　1994
２．三好賢周　　情報科学入門－コンピュータ・ア・ラ・カルト　第４.２版　飯島印刷　1996
３．片方善治・今井賢　　情報文化入門　　海文堂出版
４．真弓常忠　　八坂神社講演叢書　第１輯～５輯
５．八坂神社編　八坂神社由緒略記　　八坂神社
６．　　〃　　八坂神社　　学生社
７．荒俣宏　　風水先生　　集英社
８．島尾永康　　編　科学の歴史　創元社

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

［Ｆｉｇ－９　祇園祭と文化の関係］

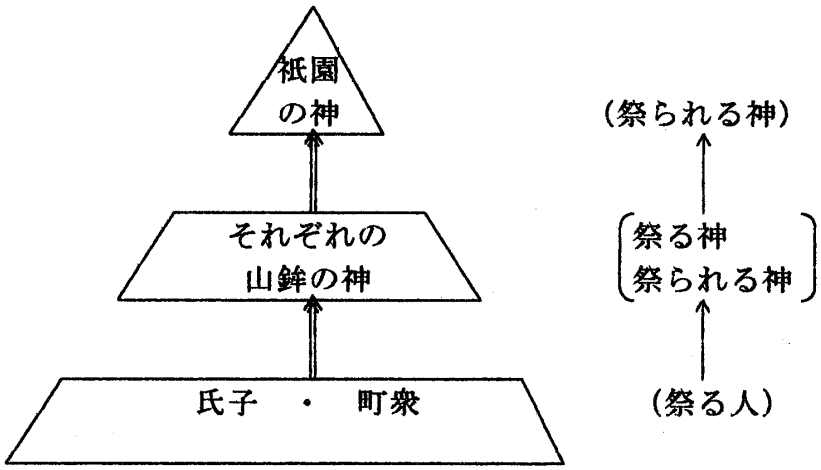


※　玉ネギ文化については、［参考文献］の１．を参照。

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

［Ｆｉｇ－１０　日本的重層信仰］



［Ｆｉｇ－１１　祇園祭のハードウェアとソフトウェア］

	主体 / 分類	祭られる神	祭る神 （祭られる神）	祭る人
（伝統）文化	ハード ウェア	・八坂神社 （宝物）	・山　鉾 （懸装品） （人形・面） ・山鉾町町屋	・氏子（町衆） ・山鉾町屋 ・稚　児 ・粽
	ソフト ウェア	・祭　神 ・信　仰 ・神　話	・（祭　神） ・祇園囃 ・能 ・茶の湯	・信　仰 ・伝　承 ・コミュニケーション ネットワーク

NII-Electronic Library Service